

企業が実施する森林環境教育研修会の参加者の意識

Environmental awareness among participants in forest environmental education workshops organized by a company

白濱真友*¹・杉浦克明*¹Mayu SHIRAHAMA *¹ and Katsuaki SUGIURA *¹*¹ 日本大学生物資源科学部

College of Bioresource Sciences, Nihon University, 1866 Kameino, Fujisawa, Kanagawa 252-0880, Japan

要旨：近年、森林環境教育の推進が求められているが、都市部に住む児童は普段森林に触れる機会は多くない。そのような中、主に児童を対象とし、身近な樹木に触れることで樹木の名前を識別できるようになり、森林に興味を持ってもらうことをねらいとした子ども樹木博士というプログラムがある。本研究の目的は、公募型の森林環境教育実践者養成講座に参加者の森林環境教育についての意識を明らかにすることである。その参加者に対し、子ども樹木博士プログラムと森林環境教育についての意識についてアンケート調査を行った。その結果、子ども樹木博士の实践をしたい、さらに保育・教育課程の中での森林環境教育の实践が必要だと考えている人が多かった。また、教育の推進には、森林に関する教育を実施するための時間を設けることが必要との回答が多かった。今回は、意識の高い人が集まったため、このような結果が生じたといえよう。

キーワード：森林環境教育・企業・子ども樹木博士・アンケート調査

Abstract: In recent years, interest in forest environmental education has increased. However, children who live in urban areas have limited opportunity to be involved in the forest. A “children’s tree doctor” program has been implemented as part of a forest environmental education program and anyone practicable program, with the aim of getting all children interested in the forest through the identification of the species of familiar trees and the chance to touch and interact with them. The purpose of this study is to get a picture of the awareness of and attitude toward forest environmental education among participants by public recruiting. A questionnaire survey was conducted on awareness of the tree doctor program and forest environmental education for the participants. Many respondents suggested the need for implement of forest environmental education such as the tree doctor program in childcare and child education. Promotion of these programs and setting aside time to participate in them were viewed as necessary. Our results generally show high awareness of forest environmental education and related programs and needs among conscious participants.

Keywords: forest environmental education, company, children’s tree doctor, questionnaire survey

I はじめに

日本の国土の約67%を占める森林は、多くの環境問題と結びついており、教育の場や対象として重要である(4)。そのような中、主に児童を対象とし、身近な樹木の名前を覚えてもらい、植物や森林に親しんでもらう機会をつくるボランティアの森林環境教育活動の一つとして「子ども樹木博士」(以下、樹木博士)というプログラムがある(2)。

一般的な樹木博士の基本的な仕組み(5)は、参加者がインストラクターの樹木の解説を受けながらコースの散策をする。その後復習をし、識別テストを受ける。識別テストは、番号の付いた樹木の標本を見ながら解答用

紙に樹種名を記入する。テストの結果により段級が認定され、樹木博士の認定証が授与されるというものである。この樹木博士の詳細については、杉浦ら(5)の報告を参照されたい。

このプログラムの特徴としては、だれでも自由に実施することができ、解説樹種数やプログラム時間等にも決まりもない(2)。つまり、実施主体によってその実施方法や内容を工夫することができるプログラムである。また、いきなり森林内での活動は敷居が高いといった参加者や幼児にも活用できるプログラムであり、段階を踏んで森林内でのイベントへの参加を促すことを目的とした導入的なプログラムとして樹木博士は利用できる。その

一方で、このプログラムの弱点としては、あくまでも樹木を対象としているため、森林・林業につなげることの難しさがある。

プラムネット株式会社アウトドア共育事業部は、その樹木博士に着目し、森林環境教育実践者を養成する講座の中で、樹木博士体験プログラムを行った。その実施の目的は、樹木博士の普及と体験活動指導者の樹木に関する知識の向上である。その体験講座は、2016年5月と9月に実施され、参加者は公募によって集められた。その講座参加者の森林環境教育に対する意識を把握することは、今後の社会教育として行う森林環境教育研修の改善や発展の手掛かりになる可能性がある。

そこで、本研究の目的は、公募型の森林環境教育実践者養成講座に参加した人の森林環境教育についての意識を明らかにすることである。

II 環境教育実践者の養成講座の概要

プラムネット株式会社の主な事業は、業務用や工業用機器の開発といった「ものづくり」であるのに対し、アウトドア共育事業部は「人づくり」に軸足を置いて事業展開している(3)。そのため、アウトドア共育事業部では、体験活動指導者向けニュースサイトの運営、指導者向け研修、ワークショップの企画・運営・受託などを行っている(3)。その事業の一環として、樹木博士を取り入れた環境教育実践者の養成講座が開催された。

2016年5月の養成講座のテーマは、理科の先生、自然解説者、野外指導者を対象に「子ども樹木博士指導法×生きものなるほど!豆知識」であり、9月テーマは、幼児や低学年の先生、保育者、野外指導者を対象に「樹木を使った幼児・親子プログラム×園庭・お散歩で出会う身近な生きもの豆知識」である。どちらも定員8名とし、一般公募により参加者を募った。募集方法は、講座の約一か月前からプラムネット株式会社が運営しているニュースサイトと学校教諭向け情報サイトに掲載し、さらにFacebookとTwitterを用いた宣伝を行った。どちらの養成講座も定員8名が集まった。

養成講座の実施時間は10:30~16:00であり、午前中に2時間で樹木博士の体験と開催方法についての解説を行った。樹木博士体験で開設した樹種数は12種とし、識別テストは10分間で行った。午後には、生きもの豆知識をクイズ形式で紹介する講座が実施された。養成講座の受講費は両日ともに、全日参加で8,800円(税別)であった。なお、樹木博士の体験講座の講師は、プラムネット(株)のインターンシップ生である筆者が務めた。

III 調査対象と方法

調査対象は、2016年5月と9月の樹木博士体験に参加した参加者16名である。その対象者に対して、主に①参加者の性別、年齢、職業(Q1)、②講座(樹木博士)の内容(Q2~Q5)、③森林(樹木・林業・木材などを含む)に関する教育(Q6~Q10)の3点についてアンケート調査を行った(表-2)。アンケート調査は、講座の最後に記入時間を設けて実施された。なお、Q2、Q9、Q10の3つの問いは自由回答形式であり、Q3~Q8は、順位回答形式である。

表-1. アンケート項目

項目番号	項目内容
Q1	性別, 年齢, 職業
Q2	樹木博士体験講座の受講理由
Q3	解説樹種の数
Q4	識別テストの実施時間
Q5	樹木博士の実施意向
Q6	保育や教育課程の中での森林に関する教育の必要性
Q7	保育園・幼稚園, 小学校校内の樹木の必要性
Q8	樹木の識別能力(樹種数)
Q9	一般の人への森林に関する知識・認識・啓発に必要なこと
Q10	森林に関する教育に関しての自由記述

IV 結果と考察

1. 性別・年齢・職業

参加者は5月、9月ともに定員に達し、合計16名であった。性別を見ると、男性7名、女性9名で男女比に大きな違いはなかった。参加者の年代は、20代が50%、30代が19%と若い世代の参加者が多い傾向が見られた(図-1)。参加者の職種をまとめると(表-2)、5月、9月をあわせて見ると、保育士(3名)、小学校教諭(1名)、小学校非常勤(1名)、自然解説員(1名)、児童館職員(1名)の計7名は、日々子どもの教育にかかわる職業に就いている人であり、その割合は高かった。よって、講座で知り得たことを自分の仕事に取り入れようとしている比較的若い世代が集まったと考えられる。しかしながら、その他の参加者は、講座のねらいとしていた先生、解説者、野外指導者ではないため、先に述べてい

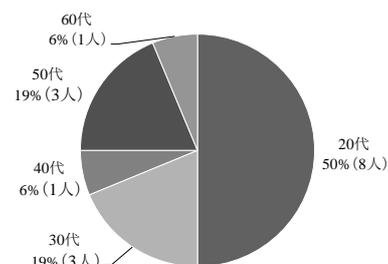


図-1. 参加者の年代

Fig. 1 Participants age

た参加者よりも環境教育に関わる機会は少ないと考えられる。

表 - 2. 参加者の職種

Table 2 Participant profession

職業	5月	9月	職業	5月	9月
大学生	0	2	団体職員	1	0
公務員	1	1	サービス業	0	1
保育士	3	0	会社員	0	1
小学校教諭	0	1	児童館職員	0	1
小学校非常勤	1	0	造園業	1	0
自然解説員	1	0	無職	0	1

2. 講座の受講理由

受講理由を見ると、大きく5つに分類することができた(複数回答可)。最も多かった回答内容は、「活動・仕事に活かしたい」であり、47%(9人)が回答した(図-2)。その回答をした人の職種を見ると、保育士(3人)、小学校教諭(非常勤含む)(2人)、児童館職員(1人)など日々子どもの教育に関わる人が多い傾向が見られた。次に、多かった回答内容は、「樹木を知りたい」であり、26%(5人)が回答した。その回答者の職種は、公務員、大学生、自然解説員、サービス業、団体職員であり、比較的子どもの教育に関わる機会が少ないと思われる回答者の傾向が見られた。よって、樹木博士のプログラムを自分の仕事に取り入れようとしている人が多く集まったといえる。

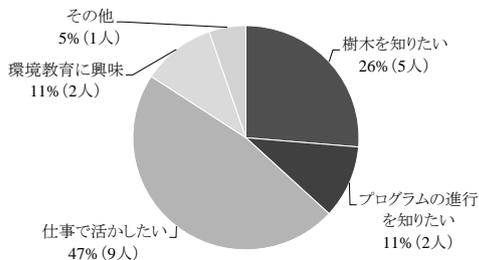


図 - 2. 講座の受講理由

Fig. 2 Reasons for attending the course

3. 解説樹種数と識別テストの時間

樹木博士のプログラム体験で解説した樹種数の12種という数は、全体の75%が「ちょうどよい」という回答であり(図-3)、実施樹数として適当であるといえる。

識別テスト時間の10分間は、全体の87%が「ちょうどよい」、13%が「やや長い」という回答であり(図-4)、適当な実施時間であったと考える。参加者も成人ということもあり、実際には早めに解答が終わる参加者が多く見られた。

4. 子ども樹木博士の実施意向

今後、樹木博士の実施の意向を見ると、全体の44%が

「非常に思う」、50%が「思う」との回答であった(図-5)。すなわち94%の人が実施してみたいという回答であり、樹木博士は自身の活動の中で実施可能なプログラムと感じたと考えられる。

5. 保育や教育課程での森林に関する教育の必要性

保育や教育課程の中で森林(樹木・林業・木材などを含む)に関する教育の必要性については、全体の69%が「非常に思う」、31%が「思う」と回答し、参加者の100%が必要を感じている(図-6)。このような講座に興味のある人が集まったため、このような結果が生じたといえる。

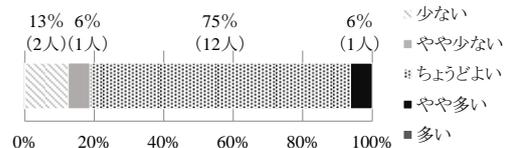


図 - 3. 解説樹種数

Fig. 3 The number of commentary the tree species

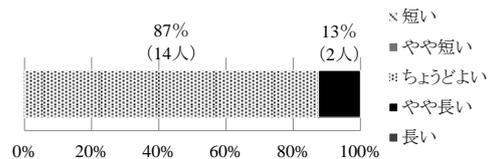


図 - 4. 識別テストの時間

Fig. 4 Time of tree species identification test

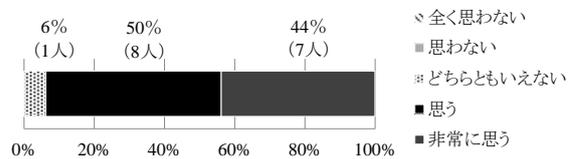


図 - 5. 樹木博士の実施意向

Fig. 5 Implementation intentions of "children's doctor tree"

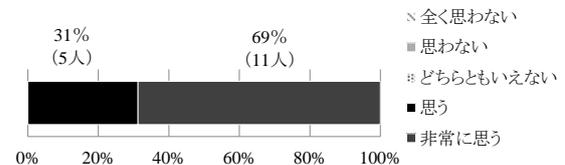


図 - 6. 森林に関する教育の必要性

Fig. 6 The need for education related to forest

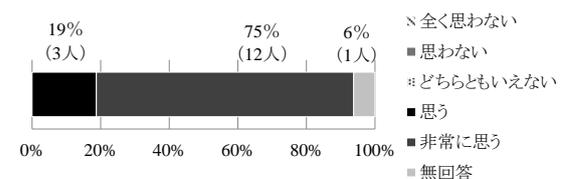


図 - 7. 保育園・幼稚園、小学校内の樹木の必要性

Fig. 7 The need for trees in nursery school, kindergarten and elementary school

6. 保育園・幼稚園，小中学校内の樹木の必要性

保育園・幼稚園，小中学校校内の樹木の必要性については，全体の75%が「非常に思う」，19%が「思う」と回答し，森林に関する教育の必要性同様，参加者の94%が必要を感じている（図-7）。このような講座に興味のある人が集まったため，今回のような結果が生じたといえる。

7. 樹種の識別能力

樹木博士体験会での識別テストの結果は考慮せず，樹種の識別能力を自己申告というかたちで調査した結果

（図-8），参加者の69%人は，樹種の識別能力が19種未満という結果であった。さらに，樹種の識別能力が19種未満の多くの人々が20代・30代の若い世代が占めており，年齢が上がるにつれて識別できる樹種数も増える傾向が見られた。これは，比較的若い世代では樹木に触れる機会が少なかったことを示唆している。今回の結果からも，教諭自身が自分の小学校に生育する植物の名前がわからない現状（1）を反映していると考えられる。

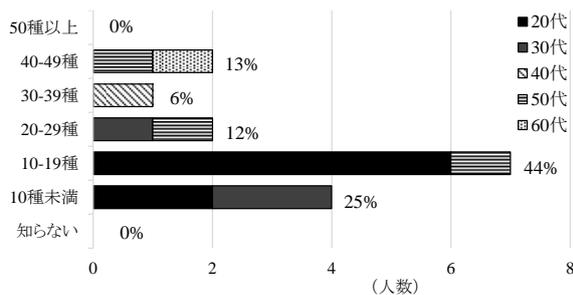


図-8. 樹種の識別能力

Fig. 8 Discrimination capability of tree species

8. 一般への森林に関する知識・認識・啓発の必要性

参加者の回答（複数回答可）は，大きく11の項目に分類することができた（図-9）。その結果，森林に関するイベントの開催が必要だという回答が27%，次いで宣伝，直接体験，公教育に取り入れることが必要だという回答

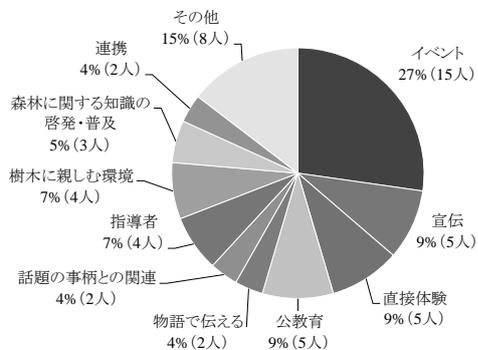


図-9. 森林に関する知識・認識・啓発の必要事項

Fig. 9 Necessary matters of knowledge, recognition and edification on forest

がそれぞれ9%を占めた。つまり，公教育に必要という意見がある一方，イベント開催等による森林環境教育が求められているのだろう。

9. 森林に関する教育に対する意識・意見

自由回答の中で，「楽しい体験プログラムを考えるのは難しい」，「公教育に取り入れるのは難しい」，「教員の勉強する時間がない」等の森林に関する教育の課題がいくつか見られた。これらのことから，実際に実施することの難しさが伺えた。

V おわりに

全体的に樹木博士や森林環境教育に好意的な意見が多かったのは，企業が実施した講座に参加するような意欲や興味がある方が集まったためであろう。その一方で，森林環境教育の実施には課題が多く難しいという潜在意識があると考えられる。

それに応えることのできる森林環境教育プログラムの一つが，「子ども樹木博士」であると考えられる。その理由として，樹木博士は校庭や公園で実施できるため実施主体に合わせて場所を決められ，指導者の専門的な知識や準備の必要性が低く，誰でも自由に実施できるためである。そのため，教員等の指導者の森林に関する教育の導入的なプログラムとして取り入れやすいと考える。

引用文献

- (1) 藤吉正明・赤根弘美・栗原耕介・隈本 純・堀真奈美 (2008) 神奈川県の小・中学校における学校内及びその近隣の植物利用に関するアンケート調査. 環境教育 18 (2) : 41-47
- (2) 木平勇吉 (2008) 森に学ぶ「子ども樹木博士」 - 森での自然体験活動 -. グリーン・エージ 413 : 8-11
- (3) プラムネット株式会社アウトドア共育事業部 (2016) FIEDAY.net - 私たちにできること -. http://www.fieday.net/?page_id=91. (閲覧日 2016年10月4日)
- (4) 杉浦克明 (2015) 発達段階に応じた森林環境教育の実施の必要性. 日本森林学会誌 97 (2) : 107-114
- (5) 杉浦克明・吉岡拓如・井上公基 (2012) 森林環境教育の実施団体に対して要求される事項の検討 - 日本大学における森林環境教育の実践から -. 森林計画学会誌 45 (2) : 33-41